広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第59号　2010　93－102

自我漏洩体験の概念と構造に関する研究

― 自我漏洩体験質問紙作成の試みを通して ―

松下　姫歌・宮成　祐輔[1]

（2010年10月７日受理）

Study on the General Concept and Nature of Egorrhea Experiences:
Trial for Development of an Egorrhea-experience Questionnaire

Himeka Matsushita and Yusuke Miyanari[1]

Abstract: In this study, egorrhea experiences were defined as episodes of egorrhearelated symptoms, including egorrhea-related symptoms observed in an otherwise normal condition. The purpose of this study was to examine the general concept and nature of egorrhea experiences by attempting to develop an egorrhea-experience questionnaire. The items of the questionnaire were determined by studying various aspects of social phobia and by analyzing the results of a previous study on egorrhea symptoms. A total of 180 university students were investigated in this study. On the basis of the factor analysis, I developed a 4-factor-structure, which comprised fear of self odor, thought broadcasting, dysmorphophobia, and erythrophobia, for characterizing egorrhea experiences. I observed that thought broadcasting, dysmorphophobia, and erythrophobia indicated egorrhea experiences that were observed in more or less normal conditions. Further, fear of self odor indicated egorrhea experiences in a wide range of conditions, i.e., from morbid to normal conditions.

Key words: egorrhea experiences, social phobia
キーワード：自我漏洩体験，対人恐怖

問題と目的

１．青年期と対人恐怖

青年期は，一般に，第二次性徴出現の頃から21, 22歳頃までの時期（藤山，2004）を指す。青年期は，精神病理学的な観点から見た場合，ぬきんでて重要な意味をもつ時期であるとされている（木村，1978）。

濱野・山中（1989）によると，青年期が問題となるのは，自分を見つめる時期，見つめさせられる時期であるからであり，青年期に入って心理的に戸惑い，その戸惑いを表現するこころの病理には事欠かず，苦しみの中心にあるのは,「私」とは何かという問いであり，自己意識をめぐる問いであるとされる。このような青年期に好発する精神疾患の一つに，対人恐怖がある。

対人恐怖とは,「他人と同席する場面で，不当に強い不安と精神的緊張が生じ，そのため他人に軽蔑されるのではないか，他人に不快な感じを与えるのではないか，いやがられるのではないかと案じ，対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一型」（笠原，1993c）である。対人恐怖に悩む者の特徴として，対人場面での自己の否定的側面を極めて詳細に意識化していると同時に，自己の性格や感情傾向とか希望や生きがいにいたるまですべて否定的にとらえる傾向が指摘されている（小川，1974）。

２．対人恐怖の種類

対人恐怖の種類には，対人緊張のほか，赤面恐怖，

[1] 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

他者視線恐怖，自己視線恐怖（正視恐怖），自己臭恐怖，醜形恐怖（醜貌恐怖）などがある。

赤面恐怖とは，人前で赤面することを恐れるものである。笠原（1993）によると，他人と同席するとき，無用な緊張とともに赤面し，そのため他人の軽蔑あるいはひんしゅくを買うのでないかと恐れ，対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症と定義される。実際に赤面する場合も，しない場合もある（笠原，1993）。

他者視線恐怖とは，他者に注目されることを恐れるものであり，これに対して，自己視線恐怖とは，自分の視線が他者を不快にすることを恐れるものである。鍋田（1993）によると，自己視線恐怖は，特定の対人状況において自己の視線が異様な鋭さ，ないしは醜さを発し，それゆえに面前する他者を傷つけ不快にすると信じ悩む病態であり，鋭すぎる，きつすぎる，いやらしいなど自分の視線に対する悪しきイメージを抱き，その視線が他者に悪しき影響を与えてしまうことへの恐怖感を訴えるものである。そのため他者がなんらかの反応をしているという確信を抱きやすいという点で関係妄想性を帯びているのも特徴である。

自己臭恐怖とは，広義には自己臭症とも呼ばれ，自分の身体からいやな臭いが発散していると思いこんで悩む状態で，臨床的には，さらにその臭いが周囲の人に不快感をあたえ，そのため他人から嫌がられると確信する。臭いの種類は，おなら，大便や性器の臭い，口臭などさまざまだが，「自分ではよくわからない」と特定できない場合も少なくない（宮本，1993）。

醜形恐怖とは，自分の身体部位の形状に他覚的には認められないにもかかわらず，独特の醜悪さ，世界に二つとあい異形性があると信じこみ，そのため他人に不快感を与えたり他人から軽蔑されたりするとして対人交渉から身を退こうとするものである。鼻，眼，髪，顎，眉，顔貌全体，頭蓋の形状，胸，乳房，足，腕，尻，性器などさまざまな身体部位がその対象となる（笠原，1993b）。

３．対人恐怖の水準

笠原・藤縄・関口・松本（1972）は，対人恐怖を①平均者の青春期という発達段階に一時的にみられるもの，②純粋に恐怖症段階にとどまるもの，③関係妄想性をはじめから帯びるもの，④前統合失調症症状として，ないしは統合失調症の回復期における後症状としてみられるものの４つに区分した。その中で，従来，対人恐怖の一型と考えられてきた自己視線恐怖，自己臭恐怖は関係妄想性を持つ点に特徴があるとし，赤面恐怖や他者視線恐怖のような，一般に青年期に一過性によく見られる対人恐怖から区別して，「重症対人恐怖」として位置づけている。

４．自我漏洩症状群

笠原（1972）は，重症対人恐怖の症状が「自分の考えが自分一人のものではなく，他人が，時には全世界がそれを知っていると感じる体験」（金，1993）である思考伝播などの精神病性の症状に移行することに着目し，その共通項として「内から外へ」という拡散的な方向性と，「洩れる」という言葉で表現されることが多いことを見出した。藤縄（1972）は，このような「自分のなかからなにかが漏れ，他人に影響を及ぼす」という基本構造をもった一連の症状を「自我漏洩症状群」と定義した。

このような，自我漏洩症状群の中核構造は，統合失調症の自我障害との共通性が指摘されている。自我障害とは能動性の意識，単一性の意識，同一性の意識，外界や他者との間に境界のある意識などが障害されて出現するものである（大森，1993）。自我障害では，「自分が影響される」という影響性症状についての様々な研究があるが，自我漏洩症状群では，「他人に影響をおよぼす」という体験構造がみられる。笠原ら（1972）は自我漏洩症状群の系列を，①自己臭恐怖ないしは妄想，②寝言妄想，独語妄想，定型的な思考伝播，ときには思考化声もふくめた伝播性体験，③自己視線恐怖（あるいは妄想），醜形恐怖（あるいは妄想）など，関係妄想性をもった重症対人恐怖，④寝言恐怖，独語恐怖と呼ぶべき神経症レベルの強迫体験の４つに整理している。

５．自我漏洩感の概念

これに対し，佐々木・丹野（2003, 2004）は，病理群のもつ自我漏洩感は関係性をはじめから帯びており，症状に対する批判力が損なわれているが，健常群では，症状に対する批判力が保たれた状態における，比較的軽度の自我漏洩体験が存在するとしている。すなわち，「何も言わないのに自分の内面的な情報が伝わると感じ，ネガティブな結果が予期される体験」を「自我漏洩感」と定義している。

この概念は，佐々木・丹野（2003, 2004）が調査研究をもとに抽出したものである。具体的には，自我漏洩感が生じる状況などについて大学生に自由記述を求め，得られた項目をもとに因子分析をおこなった。その結果，「異性の好意状況」，「以心伝心的に伝わる状況」，「賞賛される状況」，「共感される状況」，「不潔状況」，「赤面状況」，「親しい人にお見通し状況」，「平静を装う状況」，「苦手な相手状況」の９つの因子を得，さらに，これらの９因子を，１）自分から相手に伝わる内容，２）相手に伝わることによって予期される結果，３）相手に対して持っている感情，の３側面から分類した結果，抽出された特徴である。

さらに,「自我漏洩感」は,相手を内心では苦手と思っていることが伝わる「苦手な相手」,自分の内面の同様が伝わる「赤面・動揺」,自分が不潔な人間であることが伝わる「不潔」,相手に考えていることが伝わる「お見通し」,内心の優越感が伝わる「賞賛」の5つの因子からなるとされ,この5因子からなる自我漏洩感状況尺度を用いて健常な大学生を対象に調査を実施したところ,自我漏洩感は大学生に多く体験されていることが明らかとなっている。

6．本研究の視点

佐々木・丹野（2003, 2004）の試みは,青年期における,自己を見つめ,自己を捉えようとする課題と,やはり青年期に好発する統合失調症における自我障害の中核課題との間にある,共通項と差異を見出すことにつながるものとして評価しうる。また,青年期に好発する対人恐怖の本質に迫るための一歩として評価しうる。しかし,自我漏洩感の概念と自我漏洩症候群および対人恐怖との比較については,まだ十分に議論されているとは言い難い。

この点に関し,自我漏洩感状況尺度に含まれる内容を,自我漏洩症候群と比較すると,自我漏洩感状況尺度の5因子は,内面のネガティヴなものが伝わる,あるいは,内面が伝わるとネガティヴに受け取られるという,いずれも内面が伝わる「思考伝播」に近いものに偏っており,自我漏洩症候群の典型である自己視線恐怖,自己臭恐怖のように自己の視線や臭い自体が他者に影響を与えるという側面が含まれていない。つまり,自我漏洩症候群においては,ネガティヴなものを内面のものとして受け入れ難いために,自己の「視線」や「臭い」という「身体性」に置き換えられていると考えられ,その点が,自我漏洩感と自我漏洩症候群との重篤度の違いであるとひとまずは言えよう。

しかし,一方で,軽度の「自己視線恐怖」や「自己臭恐怖」は青年期に一過性によく現れることが知られている。その点において,自我漏洩感状況尺度は,「内面の漏洩」に偏っていると言え,これは項目作成の前提となった自由記述の際に,「内面が身体性を帯びて漏洩する」面については埒外のものとして扱われてしまった可能性がある。したがって,この点を含めての再検討が必要である。

一方,自我漏洩感状況尺度と,対人恐怖傾向を測定する従来の尺度について比較してみたい。

対人恐怖傾向を測定する尺度については,古くは小川(1974)の尺度が存在するが,これを批判検討し(堀井・小川,1996a),改良を加え再構成した対人恐怖心性尺度（堀井・小川,1996b）には,「〈自分や他人が気になる〉悩み」,「〈集団に溶け込めない〉悩み」,「〈社会場面で当惑する〉悩み」,「〈目が気になる〉悩み」,「〈自分を統制できない〉悩み」,「〈生きることに疲れている〉悩み」の6因子が含まれている。福井（2006）の対人恐怖尺度では,対人恐怖の重篤度にごく軽症の「ふれあい恐怖」も含め,「ふれあい恐怖」,軽症対人恐怖の範疇にある「外見恐怖」,「赤面恐怖」,「他者視線恐怖」,重症対人恐怖の範疇にある「自己視線恐怖」,「体臭恐怖」の6因子が含まれている。これらは,対人恐怖を持ちやすい人に見られやすい症状といった外的指標にあたる面を重視しており,重篤度ごとに内容が区切られたり,必ずしも対人恐怖に固有とは言えない,全般的な不安も含まれていたりしており,対人恐怖の中核的な心的構造を抽出するものではない点で,自我漏洩感状況尺度とは異なるものである。

一方,堀井（2006）の対人恐怖心性尺度Ⅱは,対人恐怖心性を「対人場面で自己の攻撃性が他者に向けられる,または他者の攻撃もしくは他者に投影された自己の攻撃性が自己に向けられることによって自己の安全感が損なわれることへの心理的傾向」として,対人恐怖の中核となる心的構造を扱おうとするものであるが,「劣等恐怖」,「被害恐怖」,「自己視線・醜形恐怖」,「孤立・親密恐怖」,「加害恐怖」の5因子が含まれるものの,ここでも,「自己臭恐怖」は含まれていない。

これらを踏まえ,本研究では,対人恐怖や自我漏洩症候群の中核課題と青年期における発達課題の連続性と差異と深くかかわると考えられる,「自我漏洩体験」を,健常範囲で体験されうる自我漏洩症状様の体験,すなわち,「何も言わないのに,自分の心身に生じていることが伝わると感じ,ネガティブな結果が予期される体験」と定義し,質問紙の作成を通してその概念と構造を検討することを目的とする。

方　法

1．自我漏洩体験質問紙の作成

まず,自我漏洩症状に含まれる「赤面恐怖」,「自己視線恐怖」,「自己臭恐怖」,「醜形恐怖」,「思考伝播」の5つに関し,笠原ら（1972）をはじめ,自我漏洩症状に関する理論的研究や事例研究をもとに,自我漏洩症候群に相当する水準とその内容を明確にした。その上で,これらの5症状のそれぞれに関し,青年期に一過性に生じうる水準における,自我漏洩的な心的構造が内包された体験を測定しうる項目を,対人恐怖尺度（福井,2001),自我漏洩感状況尺度（佐々木・丹野,2004),対人恐怖心性尺度Ⅱ（堀井,2006）及び事例研究における記述を参考に作成した。5つの概念について,一過性の水準内での重篤度の幅を含ませるとと

Table 1　自我漏洩体験質問紙の項目（左端の数字は質問紙における項目番号）

赤面恐怖に関する項目	
1	人前で顔が赤くなっていないか気になることがある
3	自分のことをいわれているように思い顔がほてってくることがある
5	赤面することが多い方だ
11	友達にからかわれて顔が赤くなってしまったとき，動揺していることがばれてしまったように感じることがある
24	自分の顔が赤くなってくると，ますますドギマギすることがある
31	人の前で間違いを指摘され，顔を赤らめているとき，恥ずかしいと感じていることがばれてしまうように感じることがある
33	赤面すると，人から軽蔑されるのではないかと思うことがある
35	話をしていると，自分の顔が赤くなってくるのがわかることがある
自己視線恐怖に関する項目	
4	自分の目つきが異様だと思うことがある
6	自分の目つきが周りの人を不快にしているのではないかと思うことがある
14	変なことを考えていてふと人と目が合ったとき，考えていたことがわかってしまったのではないかと思うことがある
21	人に嫌なことを頼まれたりしたとき，不快感が目つきに出ていたのではないかと感じることがある
25	相手の目を見ると，相手が目をそらすことがある
32	苦手な人と話すとき，苦手意識が自分の目つきに出てしまい，相手にそれがわかってしまったと感じることがある
36	自分の目つきは悪いと思うことがある
40	人と会っていると目つきがきつくなることがある
自己臭恐怖に関する項目	
7	人が手を鼻にもっていくのを見ると，嫌な思いをさせているのではないかと思うことがある
12	自分の身体から変な臭いが出ていると思うことがある
17	自分の臭いのせいで，嫌がられるのではないかと思うことがある
18	人が自分から離れていくと，自分の体臭のために避けられていると感じることがある
23	体が臭いと，不潔な人だと思われるのではないかと感じることがある
27	知らない間に，おならがもれていると感じることがある
29	人が顔をしかめると，自分の体から嫌な臭いがでているのではないかと思うことがある
34	自分の身体の臭いが，人を不快にしていると思うことがある
醜形恐怖に関する項目	
2	自分の容姿のために周囲の人に好かれないと思うことがある
8	体の一部が人よりもよくないと思うことがある
9	食べ過ぎて太るのがこわいと思うことがある
15	自分の外見がよくないために，人から軽蔑されると思うことがある
16	もっとやせたいと思うことがある
19	容ぼうを気にしてしまうことがある
37	自分の顔がみにくいと思うことがある
39	自分の外見が人と比べて気になることがある
思考伝播に関する項目	
10	何かで失敗したとき，周りの人に自分のショックな気持ちが見透かされているように感じることがある
13	他の人の前で誉められたとき，他の人が優越感を見透かしているかのように感じることがある
20	人に見栄をはってウソをついてしまったとき，見栄をはったことがばれてしまっているような気がすることがある
22	苦手な人に話しかけられたとき，嫌だと思っていることが顔に出てばれたのではないかと感じることがある
26	言い間違いをしてしまったとき，恥ずかしい気持ちが悟られてしまっているかのように感じることがある
28	人に約束を破られたとき，顔がこわばっていて不快な気持ちが伝わってしまったのではないか，と感じることがある
30	他の友達も一緒にいるのに自分にだけ異性が話しかけてくるとき，得意な気持ちが周りの友達に伝わってしまったような気がすることがある
38	特に何も言わなくても自分の考えが人に知られていたとき，何で分かるのだろうかと不思議に思うことがある

もに，概念間に重篤度の偏りが生じないよう配慮し，それぞれ８項目ずつ，計40項目を作成した（Table 1）。

「赤面恐怖」項目は，笠原（1993a）の定義や鈴木（1959）の記述を参考に作成した。水準については，１）赤面することに感情を伴わない，２）赤面が感情と結びついているが強迫不安にはならない，３）赤面が強迫観念になっている，４）赤面と軽蔑されるという感情が結びついている，という４条件を含むように作成した。

「自己視線恐怖」項目は，笠原（1993a）の定義および笠原（1972）の記述より，１）自己の視線に対して悪いイメージを抱く，２）自己の視線が他者を傷つけ不快にする，３）自己の視線によって忌避される，４）自己の視線を通じて，自分の内面や動揺が相手に伝わる，の４条件を含むよう作成した。

「自己臭恐怖」項目は，宮本（1993）の定義や，笠原（1972），宮本（1976），宮岡・阿部（1990）の記述等を参考に，１）身体から臭いが洩れる，２）臭いが他者に不快感を与える，３）臭いによって忌避される，４）臭いによって不潔な人間と思われるという４条件を含むよう作成した。

「醜形恐怖」項目は，定義及びDSM-Ⅳ-TR（APA，2000）の記述から，１）外見に対する想像上の欠陥へのとらわれや小さい身体的異常への不安，２）身体的欠陥が他者に不快感を与える，３）身体的欠陥によって忌避される，４）身体的欠陥によって軽蔑されるという４条件を含むよう作成した。

「思考伝播」項目は笠原ら（1972）等を参考に，１）自己の考えが何も言わなくても相手に伝わる，２）自己の恥を取り繕っていることが伝わる，３）自己や他者についてのネガティヴな思いが伝わる，４）自己の内心の優越感が伝わるという４条件を含むよう作成した。

内容的妥当性については，臨床心理学を専門とする教員による検討を行った。

２．手続き

被検者　大学生180名（男性69名，女性109名，不明２名）で，平均年齢20.03歳（SD＝1.14）であり，そのうち男性の平均年齢は20.22歳（SD＝1.32），女性の平均年齢は19.91歳（SD＝.996）であった。

集団法により質問紙調査を実施した。

質問紙と施行法　独自に作成した自我漏洩体験質問紙を集団法にて実施した。青年期に一過性に体験しうる水準での「赤面恐怖」「自己視線恐怖」「自己臭恐怖」「醜形恐怖」「思考伝播」を図りうると考えられる項目，各８項目，計40項目について，自分に当てはまる度合いを「ほとんどない」から「かなりある」までの５件法で評定を求めた。

結果と考察

１．自我漏洩体験質問紙の分析

天井効果，床効果がみられる項目は認められなかったため，全40項目を分析対象とした。

固有値と解釈可能性から因子数を４に指定し，最尤法 *promax* 回転による因子分析を行った。因子負荷量．40未満の項目及び２因子に渡って .40以上の負荷を示す８項目を除いた結果，32項目が採択され，４つの因子が抽出された。残された項目は第１因子７項目，第２因子10項目，第３因子８項目，第４因子７項目であった（Table 2）。

得られた各因子について，被検者ごとに，当該因子の下位項目の素点を合計することで因子得点を算出した。次に，各因子得点の上位25％・下位25％にあたる被検者を上位群，下位群とし，G-P 分析を行った。その結果，各因子得点と当該因子の下位項目全てについて有意差が認められた（p<.01）。さらに，各因子の合計得点と当該因子の下位項目との間の Pearson の相関係数を求めたところ，全て r＝.40以上であり，無相関として除外される項目はなかった。Cronbach の α 係数は，第１因子が .898，第２因子が .852，第３因子が .864，第４因子が .884と高く，各因子の内的一貫性が確認された。

２．因子分析によって得られた因子の検討

第１因子には，「自己臭恐怖」項目として作成した８項目のうち，７項目が抽出された。具体的には，〈人が自分から離れていくと，自分の体臭のために避けられていると感じることがある〉，〈人が顔をしかめると，自分の体から嫌な臭いがでているのではないかと思うことがある〉などの項目が含まれた。このことから，第１因子を「自己臭恐怖」因子と命名した。

第２因子として抽出された10項目には，「自己視線恐怖」を測りうると想定した４項目および，「思考伝播」を測りうると想定した６項目が含まれた。

具体的には，「自己視線恐怖」項目については，作成した８項目のうち，〈苦手な人と話すとき，苦手意識が自分の目つきに出てしまい，相手にそれがわかってしまったと感じることがある〉，〈人に嫌なことを頼まれたりしたとき，不快感が目つきに出ていたのではないかと感じることがある〉，〈変なことを考えていてふと人と目が合ったとき，考えていたことがわかってしまったのではないかと思うことがある〉，〈相手の目を見ると，相手が目をそらすことがある〉の４項目が含まれた。

また，「思考伝播」項目については，〈苦手な人に話しかけられたとき，嫌だと思っていることが顔に出て

Table 2　自我漏洩体験質問紙の因子分析結果（最尤法，*promax* 回転）（左端の数字は質問紙における項目番号）

項目番号		F1	F2	F3	F4	共通性
因子Ⅰ：自己臭恐怖（α=.898）						
18(自己臭)	人が自分から離れていくと，自分の体臭のために避けられていると感じることがある	.892	.020	-.154	.111	.740
29(自己臭)	人が顔をしかめると，自分の体から嫌な臭いがでているのではないかと思うことがある	.858	-.037	-.095	.023	.647
34(自己臭)	自分の身体の臭いが，人を不快にしていると思うことがある	.837	-.030	-.017	.042	.685
17(自己臭)	自分の臭いのせいで，嫌がられるのではないかと思うことがある	.770	-.040	.118	-.097	.640
12(自己臭)	自分の身体から変な臭いが出ていると思うことがある	.747	.070	.075	-.071	.645
7(自己臭)	人が手を鼻にもっていくのを見ると，嫌な思いをさせているのではないかと思うことがある	.618	-.166	.021	.119	.368
23(自己臭)	体が臭いと，不潔な人だと思われるのではないかと感じることがある	.521	.157	.123	-.135	.415
因子Ⅱ：思考伝播（α=.852）						
32(視線)	苦手な人と話すとき，苦手意識が自分の目つきに出てしまい，相手にそれがわかってしまったと感じることがある	-.032	.801	-.098	-.017	.544
22(思考)	苦手な人に話しかけられたとき，嫌だと思っていることが顔に出てばれたのではないかと感じることがある	-.069	.757	-.058	.002	.498
21(視線)	人に嫌なことを頼まれたりしたとき，不快感が目つきに出ていたのではないかと感じることがある	-.098	.736	.066	-.042	.511
28(思考)	人に約束を破られたとき，顔がこわばっていて不快な気持ちが伝わってしまったのではないか，と感じることがある	.073	.654	-.124	.036	.419
26(思考)	言い間違いをしてしまったとき，恥ずかしい気持ちが悟られてしまっているかのように感じることがある	-.141	.575	.106	.119	.420
20(思考)	人に見栄をはってウソをついてしまったとき，見栄をはったことがばれてしまっているような気がすることがある	.058	.545	.117	-.037	.389
13(思考)	他の人の前で誉められたとき，他の人が優越感を見透かしているかのように感じることがある	.188	.511	.018	-.068	.354
14(視線)	変なことを考えていてふと人と目が合ったとき，考えていたことがわかってしまったのではないかと思うことがある	.262	.508	-.221	.001	.313
10(思考)	何かで失敗したとき，周りの人に自分のショックな気持ちが見透かされているように感じることがある	-.155	.465	.173	-.071	.234
25(視線)	相手の目を見ると，相手が目をそらすことがある	.066	.464	-.007	.042	.262
因子Ⅲ：醜形恐怖（α=.864）						
19(醜形)	容ぼうを気にしてしまうことがある	.067	-.077	.853	-.040	.703
8(醜形)	体の一部が人よりもよくないと思うことがある	-.078	-.046	.843	-.092	.571
39(醜形)	自分の外見が人と比べて気になることがある	-.058	-.020	.775	.055	.576
37(醜形)	自分の顔がみにくいと思うことがある	.182	-.054	.665	.173	.683
16(醜形)	もっとやせたいと思うことがある	-.067	-.054	.566	.018	.268
2(醜形)	自分の容姿のために周囲の人に好かれないと思うことがある	.140	.171	.478	.036	.471
15(醜形)	自分の外見がよくないために，人から軽蔑されると思うことがある	.261	.208	.463	-.094	.537
9(醜形)	食べ過ぎて太るのがこわいと思うことがある	-.035	.070	.403	-.001	.180
因子Ⅳ：赤面恐怖（α=.884）						
5(赤面)	赤面することが多い方だ	-.023	-.200	.062	.930	.757
1(赤面)	人前で顔が赤くなっていないか気になることがある	-.004	-.081	.046	.802	.614
35(赤面)	話をしていると，自分の顔が赤くなってくるのがわかることがある	.053	.045	-.153	.790	.600

24(赤面)	自分の顔が赤くなってくると，ますますドギマギすることがある	.047	.043	-.072	.741	.559
3(赤面)	自分のことをいわれているように思い顔がほてってくることがある	.155	.098	.093	.499	.447
31(赤面)	人の前で間違いを指摘され，顔を赤らめているとき，恥ずかしいと感じていることがばれてしまうように感じることがある	-.050	.273	.064	.496	.470
11(赤面)	友達にからかわれて顔が赤くなってしまったとき，動揺していることがばれてしまったように感じることがある	-.170	.363	.110	.471	.527
	固有値	6.454	6.842	6.519	5.417	
	因子間相関 F1					
	F2	.415				
	F3	.512	.504			
	F4	.242	.470	.383		
採択されなかった項目						
40(視線)	人と会っていると目つきがきつくなることがある	.382	.220	.082	-.012	
4(視線)	自分の目つきが異様だと思うことがある	.369	.289	.150	-.099	
6(視線)	自分の目つきが周りの人を不快にしているのではないかと思うことがある	.309	.396	.080	-.047	
30(思考)	他の友達も一緒にいるのに自分にだけ異性が話しかけてくるとき，得意な気持ちが周りの友達に伝わってしまったような気がすることがある	.210	.344	.034	.013	
33(赤面)	赤面すると，人から軽蔑されるのではないかと思うことがある	.401	.115	.446	-.185	
38(思考)	特に何も言わなくても自分の考えが人に知られていたとき，何で分かるのだろうかと不思議に思うことがある	-.127	.183	.207	.229	
27(自己臭)	知らない間に，おならがもれていると感じることがある	.396	.108	-.057	.094	
36(視線)	自分の目つきは悪いと思うことがある	.100	.395	.096	.022	

※（自己臭）は自己視線恐怖，（視線）は自己視線恐怖，（思考）は思考伝播，（醜形）は醜形恐怖，（赤面）は赤面恐怖に関する項目と想定されたもの

ばれたのではないかと感じることがある〉，〈人に見栄をはってウソをついてしまったとき，見栄をはったことがばれてしまっているような気がすることがある〉など作成した８項目中６項目が含まれた。

もともとは，「自己視線恐怖」と「思考伝播」はそれぞれ別の因子として抽出されることを想定していたが，第２因子として抽出された「自己視線恐怖」４項目の内容を検討してみると，４項目中３項目が〈苦手意識が自分の目つきに出てしまい，相手にそれがわかってしまった〉〈不快感が目つきに出ていたのではないかと感じる〉〈目が合ったとき，考えていたことがわかってしまったのではないかと思う〉など，相手に考えや感情が伝わるという要素を含んでいた。

自己視線恐怖は基本的に，「自己の視線が異様な鋭さ，ないしは醜さを発し，それゆえに面前する他者を傷つけ不快にすると信じ悩む」（鍋田，1993）というように，自分の視線を通して，ネガティヴなものが漏洩し，他者に影響を及ぼすものを指すが，そのうち，「自己の視線を通じて，自己の内面が伝播する」側面が，この第２因子に抽出されたと考えられる。

したがって，第２因子は，広義での「思考伝播」という側面が抽出されたものと考えられるため，「思考伝播」と命名する。

第３因子は，〈容ぼうを気にしてしまうことがある〉〈自分の外見がよくないために，人から軽蔑されると思うことがある〉など，「醜形恐怖」として作成した８項目が全て抽出された。したがって，第３因子を「醜形恐怖」と命名する。

第４因子には，〈人前で顔が赤くなっていないか気になることがある〉〈友達にからかわれて顔が赤くなってしまったとき，動揺していることがばれてしまったように感じることがある〉など，「赤面恐怖」として作成した８項目中７項目が抽出された。このことから，第４因子を「赤面恐怖」とした。

３．採択されなかった項目についての分析

次に，採択されなかった項目について検討する。

１）自己臭恐怖に関する項目については，〈知らない間に，おならがもれていると感じることがある〉が採択されなかった。今回の分析では，因子負荷量．40以上を基準としているため，採択されなかったが，この

項目の「自己臭恐怖」因子（第１因子）の因子負荷量は.396であり，他の因子への負荷量も低く，この項目が測りうるものは，第１因子に採択された「自己臭恐怖」項目と共通するものと考えられる。にも関わらず，この項目の「自己臭恐怖」因子への因子負荷量が.40に満たなかったのは，本項目が「おなら」という具体性を含むものであったことが関係しているかもしれない。

２）自己視線恐怖に関する項目については，「自己臭恐怖」因子（第１因子）に比較的高い因子負荷量が見られる項目と，「思考伝播」（第２因子）に比較的高い因子負荷量が見られる項目がある。

〈人と会っていると目つきがきつくなることがある〉,〈自分の目つきが異様だと思うことがある〉は,「自己臭恐怖」因子（第１因子）に，それぞれ，.382，.369と，比較的高い因子負荷量を示している。これらの項目は,「自己の視線そのものに，直接的具体的に，ネガティブないし異質なイメージを抱く」という要素を含んでおり,「自分の身体を通じて，ネガティブなものが漏れ出る」という面で自己臭恐怖に近いものであったからと考えられる。

一方,〈自分の目つきが周りの人を不快にしているのではないかと思うことがある〉,〈自分の目つきは悪いと思うことがある〉は「思考伝播」因子（第２因子）にそれぞれ.396，.395と比較的高い負荷量を示している。「自己視線恐怖」項目として想定していた項目のうち,「思考伝播」因子に採択された４項目のうち３項目は，すでに述べたように,「視線から，自己の内面にあるネガティブな思いや異質な考えが相手に伝わる」というように,「ネガティブあるいは異質なものを，内面のものとして認めている」ものであり，もう１項目は〈相手の目を見ると，相手が目をそらすことがある〉という,「視線によって忌避される」ものである。

したがって,同じ「自己視線」にまつわる体験であっても，そのネガティブ面や異質面が,「目つき」そのものという「身体性」次元で捉えられている場合は,「自己臭恐怖」と近い次元の体験であり，一方,「目つき」であっても，それを「悪い」と「意味付ける」という内面化が生じたり,「視線」を通して「内面の悪いもの・異質なものが伝わる」など，ネガティブ面や異質面が「内面性」次元で捉えられている場合は,「思考伝播」と近い次元での体験であると考えられる。

３）思考伝播に関する項目では,〈他の友達も一緒にいるのに自分にだけ異性が話しかけてくるとき，得意な気持ちが周りの友達に伝わってしまったような気がすることがある〉〈特に何も言わなくても自分の考えが人に知られていたとき，何で分かるのだろうかと不思議に思うことがある〉の２項目が因子負荷量の低さのため採択されなかった。前者については，最も高い因子負荷量が「思考伝播」因子（第２因子）への.344であるので方向性としては一致しているが，負荷量が低かったのは，他の友達も一緒にいるのに自分にだけ異性が話しかけてくるという状況を経験したことがあるかということが問題になった可能性がある。後者については，単に考えている内容が伝わるというものであり，いずれの因子にも負荷量が低かったため，このような体験は，通常は,「自己の心身に生じていることが伝わり，他者にネガティブな影響を及ぼす」体験とは別のものとして体験されていることが示唆される。

４）赤面恐怖に関する項目では,〈赤面すると，人から軽蔑されるのではないかと思うことがある〉が,「醜形恐怖」因子（第３因子）に.446,「自己臭恐怖」因子（第１因子）に.401と２つの因子にまたがって高い負荷量を示したため,今回は採択しなかった。しかし，同じ「赤面」にまつわる体験でも,「赤面恐怖」（第４因子）には負荷がごく低かったことは注目に値する。「赤面恐怖」因子の内容は,「赤面」傾向や「赤面」によって「内面が伝わる」ことにまつわるものである。しかし,採択されなかった本項目は,「赤面」によって，自己がネガティブなものとして評価され，異質なものとして忌避されるという面が強調されており，そのような体験は，むしろ,「身体性」次元で「ネガティヴで異質」なものが他者に影響を与えるという意味で,「自己臭恐怖」や「醜貌恐怖」に近い体験と考えられる。

４．因子間の相関分析

第１因子「自己臭恐怖」因子,第２因子「思考伝播」因子，第３因子「醜貌恐怖」因子，第４因子「赤面恐怖」因子の，４因子間の相関係数について検討したところ，第１因子－第２因子間が.415，第１因子－第３因子間が.512，第１因子－第４因子間が.242，第２因子－第３因子間が.504,第２因子－第４因子間が.470,第３因子－第４因子間が.383であった。

各因子間におおむね中程度以上の正の相関がみられたことは，藤縄（1972）が指摘した通り，自我漏洩症状群に含まれる各症状には自分の中からなにかが漏れ，他人に影響をおよぼすという基本構造があり，その本質には共通する部分があるからと考えられる。

５．本研究で抽出された自我漏洩体験の概念

本研究の結果，青年期において一般に生じうる「何も言わないのに，自分の心身に生じていることが伝わると感じ，ネガティブな結果が予期される体験」という共通項をもつ「自我漏洩体験」は,「自己臭恐怖」因子,「思考伝播」因子,「醜貌恐怖」因子,「赤面恐怖」因子の４因子からなるものとして抽出された。

この結果は，想定していたものに近いものの,「自

己視線恐怖」が独立したものとして抽出されなかった点が異なっていた。この点については，既に述べたように，同じ「自己視線」にまつわる体験でも，そのネガティブ面や異質面を内面性次元で捉えているか，内面化せずに身体性次元で捉えているかで，前者は「思考伝播」体験，後者は「自己臭恐怖」体験に近くなることが示された。加えて，今回は項目採択基準を因子負荷量 .40以上としたため，前者のみが「思考伝播」因子として採択された。

基準を，因子負荷量 .40以上とした場合には採択されないが，因子負荷量 .35とした場合には十分採択される項目としては，1）「自己臭恐怖」因子（第１因子）の因子負荷量にそれぞれ .396，.382，.369と比較的高い負荷量を示した，〈知らない間に，おならがもれていると感じることがある〉，〈人と会っていると目つきがきつくなることがある〉，〈自分の目つきが異様だと思うことがある〉，２）「思考伝播」因子（第２因子）に .396，.395と比較的高い負荷量を示している〈自分の目つきが周りの人を不快にしているのではないかと思うことがある〉，〈自分の目つきは悪いと思うことがある〉といった５項目がある。加えて，３）因子負荷量は .40以上であるが，「自己臭恐怖」因子（第１因子）に .401，「醜形恐怖」因子（第３因子）に .446，と２つの因子にまたがって高い負荷量を示しているために今回採択しなかった，〈赤面すると，人から軽蔑されるのではないかと思うことがある〉がある。

これらの結果を，先行研究と照らしてみると，まず「自己臭恐怖」については，〈知らない間に，おならがもれていると感じることがある〉という，具体的な臭いの内容を表す項目が採択されなかったが，福井（2001）では採択されている。このことについて，本研究では大学生を対象としたが，福井（2001）の調査は高校生を対象としたことが関係する可能性がある。藤山（2004）によると，高校生の時期に相当する青年期中期は，自己への関心が増大する時期である。一方，大学生の年代に相当する青年期後期は，自分とは何かという問題に一応の決着がつきはじめる時期であり，その人らしさが獲得され，職業や社会的役割が選択される。そのため，高校生では自己の身体の具体的な臭いにまで注意が及ぶが，大学生では具体的な自分の臭いよりも，周囲に目が向き，臭いの本質や及ぼす影響の方が重視されると推察される。加えて，宮本（1993）は，自己臭の患者のほとんどは臭いの原因が体のどこかにあると信じると指摘しており，「身体性」次元寄りの自我漏洩症候群の範疇に触れうる項目は，「内面性」次元寄りの項目とは区別される方向にあると考えられる。

また，採択された項目には，「自己視線恐怖」の条件のうち，「①自己の視線に対して悪いイメージを抱く」という部分が含まれていなかった。これは，自己視線恐怖には関係妄想性を伴う症例が多い（高橋，1990）というように，健常大学生においては体験されることが少ないからであると推察される。

さらに，「醜形恐怖」に関しては，本研究では単独で因子が抽出されたが，堀井（2006）では〈自己視線・醜形恐怖〉として自己視線恐怖と同じ因子となっている。これは，堀井（2006）の自己視線恐怖の内容に近い項目が，〈目つき〉という身体性を含んでいたからであると考えられる。

今回の結果では，「自己視線」にまつわる項目は，そのネガティブさが「内面性」次元で捉えられている場合は「思考伝播」と共通し，自己視線のネガティブさや異質さが「身体性」次元で捉えられている項目については，「自己臭恐怖」因子に負荷量が比較的高かったが，.40に満たないため未採択である。「自己視線」にまつわる体験であっても，それを捉えている次元によって意味が異なる可能性がある。この点は，「赤面恐怖」に関しても言える。「赤面恐怖」は，福井（2001）や堀井（2006）とほぼ同様の結果であったが，赤面によって軽蔑されるという項目は，むしろ「自己臭恐怖」や「醜貌恐怖」に負荷が高かった。「自己視線」にしろ「赤面」にしろ，それが「内面性」次元ではなく「身体性」次元でそのネガティブさや異質さが捉えられている場合は，やはり，従来「自我漏洩症候群」水準のものとして捉えられている「自己臭恐怖」や「醜貌恐怖」の範疇に性質が近づくのだと考えられる。

以上のことから、本研究で捉えられた自我漏洩体験は、「自分の中からなにかが漏れる」という自我漏洩症状群の基本構造を持ちつつ健常範囲に含まれる体験を包括する概念であると言える。さらに、自我漏洩体験は、自我漏洩症状群と類似した構造をもっていると考えられる。具体的には，「自己の心身に生じているネガティブな面を内面性の次元で受けとめ，それが他者にネガティブな影響を与えている」体験の範疇を捉えうるものと考えられる。

これに対し，今回，採択された因子項目と方向性は一致しているものの未採択に至った６項目は，「自己の心身に生じているネガティブで異質な面を身体性の次元で捉え，それが他者にネガティブな影響を与えている」体験の範疇であるという違いがある。

その意味では，後者は，自我漏洩症候群水準の特徴に近づくため，特に因子負荷量が .40に満たないため不採択の場合は，採択されたものとの連続性がある一方で，性質の違いも含まれている可能性がある。

ただし，健常範囲で体験されうる自我漏洩体験を幅広く捉える際には，今回は未採択であったが，いずれかの因子に .35以上の負荷を示した６項目を含めることも検討に値すると考えられる。今後は，より深く自我漏洩体験を理解するために，関連する諸概念との関係を検討する必要があると考えられる。

【引用文献】

American Psychiatric Association (2000): Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders DSM-Ⅳ-TR (Text Revision). American Psychiatric Association,Washington, DC.（高橋三郎・大野裕・染矢俊幸（訳）(2002). DSM-Ⅳ-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル．医学書院 .）

藤縄　昭（1972）．自我漏洩症状群について　土居健郎（編）分裂病の精神病理　東京大学出版会

藤山直樹（2004）．思春期・青年期精神医学　小此木啓吾・深津千賀子・大野　裕（編）　精神医学ハンドブック　創元社

福井康之（2001）．新しく出現したタイプを含む対人恐怖の質問紙調査による分類の試み　心理臨床学研究，**19**(5)，477-488.

堀井俊章（2006）．対人恐怖心性尺度Ⅱの開発－対人関係におけるおびえの心性を測定する試み－　山形大学紀要（教育科学），**12**(4)，85-99.

堀井俊章・小川捷之（1996a）．対人恐怖心性尺度の作成　上智大学心理学年報，**20**，55-65.

堀井俊章・小川捷之（1996b）．対人恐怖心性尺度の作成（続報）　上智大学心理学年報，**21**，43-51.

笠原　嘉・藤縄　昭・関口英雄・松本雅彦（1972）．正視恐怖・体臭恐怖－主として精神分裂病との境界例について－　医学書院

笠原　嘉（1993a）．赤面恐怖　加藤正明・保崎秀夫・笠原　嘉・宮本忠雄・小此木　啓（編）　新版精神医学事典，Pp.478．弘文堂

笠原　嘉（1993b）．醜形恐怖　加藤正明・保崎秀夫・笠原　嘉・宮本忠雄・小此木　啓（編）　新版精神医学事典，Pp.340-341．弘文堂

笠原　嘉　(1993c). 対人恐怖　加藤正明・保崎秀夫・笠原　嘉・宮本忠雄・小此木　啓（編）　新版精神医学事典，Pp.515．弘文堂

木村　敏（1978）．思春期における自己と身体　中井久夫・山中康裕（編）思春期の精神病理と治療　岩崎学術出版社　Pp.321-341.

金　吉晴（1993）．考想伝播　加藤正明・保崎秀夫・笠原　嘉・宮本忠雄・小此木　啓（編）　新版精神医学事典，Pp.231．弘文堂

宮本忠雄（1976）．自己臭症－その症候論再考－　臨床精神医学，**5**(10)，1223-1231.

宮本忠雄（1993）．自己臭症　加藤正明・保崎秀夫・笠原　嘉・宮本忠雄・小此木　啓（編）　新版精神医学事典，Pp.300．弘文堂

宮岡　等・阿部裕美（1990）．自己臭恐怖　臨床精神医学，**19**(6)，877-881.

鍋田恭孝(1993). 自己視線恐怖　加藤正明・保崎秀夫・笠原　嘉・宮本忠雄・小此木　啓（編）　新版精神医学事典，Pp.299．弘文堂

小川捷之（1974）．いわゆる対人恐怖症者における「悩み」の構造に関する研究　横浜国立大学教育紀要，**14**，1-33.

大森健一（1993）．自我障害　加藤正明・保崎秀夫・笠原　嘉・宮本忠雄・小此木　啓（編）　新版精神医学事典，Pp.231．弘文堂

佐々木淳・丹野義彦（2003）．自我漏洩感を体験する状況の構造　性格心理学研究　**11**(2)，99-109.

佐々木　淳・丹野義彦（2004）．自我漏洩状況に対応した測定尺度の作成　精神科診断学，**15**(1)，25-36.

鈴木謙次（1959）．赤面恐怖症の研究－赤面恐怖を有する患者の症候学的分類を中心として－　精神分析研究，**6**(6)，35-50.